

『眠りの森の、いばら姫』

著：弓月あや

ill：北沢きょう

「……きみは、とても悲しい思いを乗り越えて、ここにいるんだ。そうか。きみがしっかりしているわけが、ようやく分かった」

美しい瞳にまっすぐ見据えられて、何を言っているのか、それさえも分からなくなる。この四条という男は苦手だ。考えなくてもいいことまで、考えさせられてしまう。

自分が捨て子で、孤児で、スリだという悲惨を極めた過去を持っていると、思い出すが、つらかった。

「あのさあ。俺を悲劇の主人公に仕立てるのは、やめてくんない。悲しいってことはないだろう。スリの集団に身を置いている奴なんて、誰でも似たようなもんだ。イチは両親が病気で働けないから、幼い弟妹の食いぶちを稼がなくなちゃならない。遊びでスリの一団に入る奴はいないんだ」

口早にそれだけ言うと、楓は温かいお湯の中に顎(あご)まで浸(つ)かり、目を閉じる。このオトボケ華族に付き合っていると、調子が狂う。

「そうか。そうだね。……きみの名前は、ご存知のとおり美しい樹木の名前だよ。秋に紅(こう)葉(よう)する様はすばらしい。私はとても好きだな。春の桜よりも、秋の紅葉のほうが美しいと感じるぐらいだ」

楓は黙って四条の話を聞いていたが、ふいっと窓のほうを向いてしまった。

そんなことを言われたのは初めてだったので、驚きと言ひ知れぬ感情に囚われて、胸が痛くなるような思いだったのだ。

「本当に————……楓は美しい」

囁くような四条の声が聞こえたと思ったとたん、額(ひたい)に何か柔らかいものが触れた。

楓が目を開くと、驚くぐらい近くに端正な顔がある。びっくりして顔を引くと、勢い余って浴槽に身体がぶつかった。

「な、何をするんだよっ」

「何って？ 親愛の情を示すくちづけだよ。外国ではみんながやっていることだ。きみは、初めてかな」

「だ……だって、男同士で、そんな……」

「深く考えることもない。こんなものは、ごく日常的に行われていることだよ。子供でも、当たり前にする」

「子供でも？ ……あの、男同士でも？」

「親愛の情と言っただろう。意識しすぎるから、おかしいんだ。西欧では挨拶代わりなんだよ」

「挨拶代わり……」

「そう。誰でもすることなんだ」

四条は甘い声で囁くと、もう一度、楓の額にくちづけをする。そのやさしい唇を受けると、身体中がふわふわしてきた。

これは、挨拶。外国ではごく当たり前の、誰もがやる習慣。

楓は頭の中で、四条の言葉を繰り返した。そうなのか。華族なんて、自分とは違う世界に生きている人間だから、わけの分からない習慣を当たり前のようにするのだろうか。

「どうした？ まるで夢の中を漂っているみたいな顔だ」

低い声で笑われて、頬を指先で撫でられる。そのとたん、背筋が震えた。温かいお湯の中にいるのに、どうして身体が震えるのだろうか。

おかしい。四条の傍にいと、自分が分からなくなってしまう。

ふわふわして、まるで雲の中にいるみたい。そして心地いいと感じているのに、何だか茨(いばら)の中に放り込まれたみたいに身体中が、ちくちくした。

そう。胸の奥深いところが、ちくちくするのだ。

自分は、やっぱり変になっている。この陽(ひ)の差し込む美しい浴室にいて、薔薇の香りを吸い込み、四条の手でやさしく肌を撫でられているのが悪いのだろうか。この男の傍にいと、何だか変になってくるのだ。

「……あ」

「何？ どうかしたの」

ちいさな声を上げると、四条が覗(のぞ)き込んでくる。その端整な美貌を見つめながら、蕩けそうに感じている自分が恥(は)ずかしくて目を伏せる。

だけど、感触はありありと残っていた。

唇に触れる柔らかい感触。その淫らさに思わず瞼を瞬くと四条の美しい顔が目に入った。

「……今の、なに？」

囁くような声で問いかけると、四条は幸せそうに目を細めて見つめてくる。

「西洋式に言うと、キス。日本語にすれば接(せつ)吻(ふん)だ。接吻は知っているだろう」

甘い声を聞いたとたん、胸の鼓動が早くなる。艶かしい声に背筋を震わせると、四条が笑う気配がした。

「びっくりした？」

悪戯っ子のように瞳を輝かせる四条に、楓はちょっとカチンとして言い返す。

「さっき言っていたのと違う。唇にするなんて、そんなこと言ってなかった」

思いがけない反抗の言葉に、四条は一瞬だけ目をパチクリさせたが、次の瞬間、にっこりと微笑んだ。思わず目を奪われてしまいそうな、艶やかな笑みだ。

「唇へのキスが一番、大切な人にする接吻だよ」

「大切な人？」

「そう。大切な人に嬉しいときや、やさしくしたいとき。気持ちがいいとき、不安なときにキスをするんだ。簡単で、とても気持ちがいいだろう」

四条はそう説明しながら、再び顔を近づけてくる。

このとき、本当に嫌だったら楓は逃げることができた。『何をするんだ』と叫び、いっそお湯をかけてでも、逃げられたはずだ。だけど——……。

「楓。キスをするときは、瞼を閉じるんだ」

「どうして」

「きみは面倒な子だね。説明しないと、分からないのか。瞼を閉じていたほうが、気持

ちいいからに決まっているだろう」

「気持ちいいって、どうして？」

「好きな人とキスをすると、身体が蕩ける。雲の上を飛んじゃうみたいになって、気持ち良くなるんだ」

「—————……どうして？」

「どうしてとばかり繰り返して、きみは好奇心旺(おう)盛(せい)な子供みたいだなあ」

四条は苦笑を浮かべながら、再び楓の顎を指先で持ち上げた。楓は素っ気ない口調で、ちいさく呟く。

「あんたの話が本当なら、キスというのは、大切に好きな人とするものだろう。俺は……あんたなんか、好きじゃない」

必死に言い募ったけれど、四条は目を細めるだけだった。

「あんたなんか、大切じゃない。だから今のキスは、ちっとも気持ち良くない」

「そう？ 本当に気持ち良くなかった？」

「……気持ち良くなんかない。気色悪いだけだ。俺はちっとも、ちっとも気持ち良くなんかない！ あんたの言うことは、何もかも嘘ばっかりだ」

楓が一気にまくしたてても、四条は興味深そうに見ているだけだ。何も言わなかったけれど、瞳が凶暴に輝いていた。

楓が『まずい』と気がついて身体を引こうとすると反対に、力強く抱きかかえられる。

「あ……っ」

唇はまた、唇に塞(ふさ)がれる。今度は強く、唇を押し潰されるんじゃないかというぐらいに。

「や、ん、ん……っ」

さっき四条が言ったように、これは気持ちいいということなのだろうか。

そんなことを頭の片隅で考えていると、突然、ガクンツと身体が崩れ落ちた。その楓の背を大きな掌で支えながら、四条はくちづけることをやめない。

「ん—————……っ」

初めての感触が襲ってくる。四条が何をしているのか、すぐには分からなかった。だけど次の瞬間、舌を差し込もうとしていると分かって、思わず両手を突っぱねて抵抗した。それでも四条はくちづけをやめなかった。

強引さが怖くて顔を背けようとしたけれど、とたんに大きな手にながしりと両頬を包み込まれて、身動きがとれない。

「や、やめ、やめて、もうやだ、や……っ」

やめさせようと言葉を発したとたん、熱くてぬめる舌がすべり込んでくる。その感触に怯えて身体を引こうとしたけれど、もう力が入らなかった。

どのくらいの時間、唇を合わせていたのだろうか。ずいぶん長い間だったような気もするし、入っていたお湯は少しも冷めていないので、ほんの少しだったような気もする。

「顔が真っ赤だ。のぼせたのかな」

甘い声で囁かれて目を瞬けば、笑みを浮かべた四条が自分を見つめていた。ものすごく婀娜めいた表情だった。

「もう、いい加減に浴室から出ないと、香椎が心配して覗きにやってきそうだ。さあ、行こう。立てるかな」

返事をする間もなく、四条は楓を抱いてお湯から引き上げてしまう。自分の服が濡

れるのも、お構いなした。

ビシヤビシヤになってしまった四条のシャツを見て、楓のほうか眉を顰めた。

「……濡(ぬ)れる……」

そう呟くと四条は片目だけを眇(すが)め、何ともいえない表情を浮かべる。それから内緒話をするように楓の耳元に唇を近づけた。

「子供みたいなきみの口から『濡れる』なんて言われると、動(どう)悸(き)がしそうだ」

「え……？」

四条の言っている意味が分からず、きょとんとしてしまった。

四条は、何を言っているのだろう。なぜ動悸(どうき)がするというのだ。

「なぜ？ 濡れるって、普通の言葉だろう」

「あどけない顔で、……そんな何も知らないような目をして猥(みだ)りがましいことを言われると、こちらが照れちゃうよ」

そう囁くと、四条は楓の頬にくちづけてくる。宝物に触れるみたいな動きだ。楓は身体を引き睨みつけたが、その瞳は潤(うる)んでいる。

「何をするんだ……っ」

抗議するが、その声は掠(さら)れていて力がない。四条は唇の端だけで微笑んだ。

「濡れるって言葉がどれだけ淫靡(いんぴ)か、分からない？ まあ、きみはそれでいいよ。いやらしい意味に取ってしまうのは、私が年を取った証拠かな」

甘(あま)ったるい微笑みも、耳(じ)朶(だ)に囁く『淫靡』の意味も、ちっとも分からない。ただ、淫(みだ)らな気配(きはい)がすることだけは、何となく感じ取れる。

二人の間に流れる空気は、酷(こ)く艶(えん)かしいものに変(か)わっている。そのことに楓は気づかない振りをして、ソッポを向いた。

その耳朶(じだ)が真っ赤(あか)になっているのを、四条が笑って見つめていることなど、まったく気がつかずに。

本文 p59～67 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>